

巻頭エッセイ

我が人生航路 ～何処へ～



一般財団法人民事法務協会 顧問 佐々木 暁

年齢76歳、間もなく喜寿とやらを迎える。年齢的には世にいう団塊世代の筆頭格に位置して今を生きる私である。父の生きた年齢73を超えた。

今や人生100年時代と言われているが、いつの間にか違和感なく自分の中に受け入れられ、普段の健康管理もずさんな事を棚に上げて、もしかしたらもしかするかの気になっている図々しい自分が怖い。

そんな先の事を夢見ている前に、まずはこれまで生きてきた我が人生を振り返り、ひたすら反省と懺悔の日々とすべきではないかとの天の声も聞こえる。しかしながら、私には、振り返るほどの人生も語るほどの功績も経験もないが、反省と懺悔のネタは尽きない。ほぼ敷かれたと思しきレールの上を、叩きながら確かめながら私流にひたすら慎重に真面目に歩いてきたような気がする。

そもそも我が人生を振り返るといような大そうなものではなく、敢えて言うなら、今日までの歩いてきた道程を思い出して、懐かしんだり、多少なりとも感慨にふける程度であろうか。これまで生きてきた道を「人生航路」というなら、正に平平凡凡な我が人生航路である。「人生行路」が相応しいかもしれない。いずれにしても、何しろ気持ちだけは100歳まで生きる気であるのだから、振り返るにはまだまだ先なので

ある。

田舎の貧乏家庭の五人兄弟姉妹の長男として育ち、特に将来の夢も希望もないままに、地元の小、中、高を卒業して、奇跡的に合格した国家公務員試験の資格を懐にして、闇雲に叩いた門が法務局であった。ここから我が人生の大半が始まる。その後は正に絵に描いたような公僕として慎ましく公務員生活を送り今に至る。以上、たった一言で完結する「我が人生航路」である、が如何にも寂しい、悲しすぎる。国家公務員として公僕として、ひたすら真剣に、真面目に仕事に取り組み、いつの間にかお役御免、無罪放免となった。これでは、最近はやりの自分史とやらも書き残すことが出来ない。我が人生航路は、憧れのハワイ航路ではなかったのか。

さて、何とか今日まで戦後の団塊世代として、人生の荒波に揉まれながらも、波間を運よく泳ぎ渡って生き抜いてきたところであるが、いよいよここから、今からが組織に頼らない本格的に自分の力、裁量だけの航海となる。老後航海である。目的地の見えない航海である。「後悔」とならないように気を引き締めなくてはならない。どう順調に老いを進めるかということだろうか。

作家の佐藤愛子氏によれば、老後の姿に「お元気ですか」と人に問われると「順調

です」と答えるとのこと。「順調に老いつつある」という意味で、と語っておられる。私も順調に老いてはいるようではある。

ところで、何時から何歳から老後というのだろうか。後期高齢者の枠組みに編入？された私は、紛れもない老人だといやいやながらも認識しているが、このときあたりから老後なのであろうか。人様に対して、あえて「年だから」「後期高齢者だから」「年寄りだから」と口にすることがある。決して「いやいやまだまだ若いですよ」とか「若く見えますね」とか言ってほしく言っているのではないが、女房殿には自分から「年寄りだ」と言わないようにと叱られる。客観的には老後、老人なのであろうが、それを自ら「年寄り」と口にしているのは、私のささやかな抵抗心であり、自虐的な反骨心なのであろうか。

順天堂大学医学部教授の小林弘幸先生は、ある健康講座で「思い切って老後をやめてみませんか」と提案されている。老後は、主に定年後の隠居生活を指すようですが、今は平均寿命も延び、定年も延び、趣味、スポーツ、ボランティア活動等多様な幅広い活動ができ、新たな生きがいが見つかる。現役の続行となるという事であらうか。そして「何歳になっても老後を送っていると思わないことが大切です。」と語っている。

とすれば、このような気持ちで生きていけば、まだまだ波乱万丈の人生航路は続き、振り返る暇など無いのである。何処に辿り着くか判らない。その時、その瞬間（叶うならピンピンコロリのその時）まで。

航海中には様々な情報、雑音が入ってくる。「老いては子に従え」、やれ「終活だ」、「断捨離だ」、「遺言だ」、「成年後見だ」、「尊厳死宣言だ」、「認知症予防だ」、「生活習慣病の改善だ」、・・・加えて、健康・食事・

運動・サプリメント・目・耳・歯・腰・・・だと、全ての部位、箇所の修繕・改修工事をしなければ、今後の航海がとてつもなく不安である。100歳どころか、明日をも解らない航海の途中であることを改めて思い知らされるのである。

前掲の佐藤愛子氏の著書（後記参照）の中には、人生にまつわる、しかも終着点に関わる、想いを巡らす著書が沢山ある。これでもか、これで最後だと100歳まで続く。同氏が最後だとする「思い出の屑箱」（2023年・中央公論新社刊）～愛子の戦いこれでおしまい～とあるが、おしまいの最後があるのでは、と期待する。

人それぞれにその人なりの人生があり、人生航路がある。何処かで我が人生を人生航路を振り返ってみたり、航路の辿り着く先を想像してみたりするのも悪くはないのではと想いながらも、決して荒波の押し寄せてこないことをひたすら祈る小春ボケの今日この頃である。

参照 佐藤愛子 著書（刊行年月日順不同）
一部のみ

- *九十歳「何がめでたい」（2016）
- *98歳「戦いやまず日は暮れず」（2021）
- *私の遺言（2002）
- *冥界からの電話（2018）
- *気がつけば終着駅（2019）
- *人生は美しいことだけ覚えていればいい（2019）
- *ああ面白かったと言って死にたい（2012）
- *それでもこの世は悪くなかった（2017）
- *かくて老兵は消えてゆく（2013）
- *こんなふうにして死にたい（1987）

等々